

図画工作科

齊 藤 江利子
中 川 佑 紀

1 図画工作科における「考える子」

本校の図画工作科では子ども一人一人の「つくってみたい。」「あんなことができそうだ。」「こんなふうに表したい。」という思いや「こだわり」を大切にす。子どもは思いをもち表現方法を探り、試行錯誤を重ね、「こだわり」をもって表現する。思いや「こだわり」を大切にすして表現する過程で、友達とかかわり認め合い、自分の表現を追求することで、自己肯定感や達成感を味わう。思いや「こだわり」を大切にすした造形活動を通して「豊かな感性や情操を養う」ことにつながる。

子どもは自分の思いや「こだわり」を形や色で表現するために、これまでの生活経験や既習で獲得した知識・技能を用いて、発想や構想をふくらませながら、造形活動に取り組む。このことにより、「この色の組み合わせは自分の思いにぴったりだったよ。」「もっとちがう表し方ができないかな。」など試行錯誤し、表現する姿がみられる。

子どもが自分の思いをもち、それを表現しようとする中で、友達がどのような表し方をしているのかに気付くことが新たな発想や構想を生む上で大切である。子どもは作品や造形活動を通した友達とのかかわりの中で、自分の表現を認めてもらい、友達の多様な表現を知り、自分の思いを深めることができる。「あの方法は自分の考えたものに使えるそうだな。」「自分の表したいことに近づけるためには、もっと明るい色にかえたほうがいいな。」など子どもは感性を働かせながら、試行錯誤を重ねることでより自分の思いや「こだわり」をもって表現を生み出そうとする。

以上のことから、図画工作科における「考える子」を次のようにとらえる。

造形活動を通して自分の思いをもち かかわり合いながらお互いの表現のよさを感じとり
試行錯誤しながら 自分の思いや「こだわり」をもって表現を生み出そうとする子

2 学ぶ楽しさを味わう図画工作科の授業

子どもは表現したくなる魅力ある題材に出合うことで「きれいだなあ。」「おもしろそう。」「どうやってつくったのかな。」「つくってみたい。」という思いをもつ。子どもは題材を通して出合った形や色を、「こんなふうになるのか。」「こんなことができるかな。」「これはうまくいったよ。」と試すことで表現したいイメージをふくらませていく。

子どもが自分の表したいイメージに近づけようと表現する時、「これはいい感じになってきたよ。」ということもあれば「どうしたら、思ったように表せるのだろう。」「うまくいかない。」と悩むこともある。友達とかかわる場面を設定することで、友達や自分の表現のよさを発見したり、共感したりして、認め合いながら「自分の表し方をほめてもらえた。」「～さんの表し方が参考になった。」という思いをもつ。そして、「もっと自分の思いにあった表し方をみつけたい。」「もっと立体的に表したい。」など作り続けていくための「こだわり」を見つけ、試行錯誤を重ねて、自分の思いや「こだわり」をもち表現を追求する姿へとつながっていく。

また、子どもが自己の成長を認識し、表現する楽しさや美しさ、完成したときの達成感を味わうためには造形活動の中で自分の思いを表現するために試行錯誤した跡を、ふり返ることが大切である。

表現活動や鑑賞活動の中で、上記のような「こだわり」をもち表現する「楽しさ」を味わう経験を積み重ねることが図画工作科における「考える子」を育成していくと考えている。

3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

(1) 形や色と出合い 試しながらイメージをふくらませる

子どもが感性を働かせて、「やってみたい」という思いをもち意欲的に表現活動し、もっと追求したい、表現したいという「こだわり」をもつ楽しさを味わうことができるようにするためには、子どもの実態に合う、形や色を意識した魅力ある題材を選び、出合わせる必要がある。魅力ある題材の条件は、

- ・子どもにとって興味深く価値がある
- ・形や色から発想や構想をふくらませることができる
- ・子どもにとって魅力的な素材や用具を活用でき 多様な表現が可能である
- ・思いを具体化するために試行錯誤をしながら何度もやり直しができる柔軟性がある
- ・個々の能力に応じて達成感が味わえる

などが考えられる。

題材から子どもが思いや「こだわり」をもてるように、導入や思いをもつ場面で、形や色との出合いを意識したテーマを設定するなど、題材の提示方法を工夫する。そして、追求を続けることのできる学習展開を工夫していく。

(2) かかわりを通して表現の幅を広げる

意欲的に取り組んでいても、途中で考えに行き詰まることや、発想や構想が浅いままになることがある。そんなときに、子どもは友だちとかかわり合いながら造形活動に取り組むことで、互いの作品や活動から、「それ、どうやったの。」という「問い」を見つけ、「このアイデアは自分の表したいことにも使えそうだ。」と、新たなヒントを見つけられるようにする。交流には四つのポイントがある。

- ・目で見ると 耳で聞く 手で触れるなどの感覚を大切に交流することで 互いに刺激を受け合いながらイメージをふくらませ 表し方を工夫していくことができるようにする
- ・共感する場面を設定し 全体で話し合う交流やグループでの交流 一人一人自由に回る交流など 学習形態を工夫する 目的に応じたメンバー構成を工夫する
- ・交流活動は製作前 途中 製作後など 意欲が持続するような有効なタイミングをとらえ 新たな発想に触れる場を設ける
- ・座席配置や作業場所の工夫 既習の掲示など 自然に互いの活動が見えるような学習環境を整える

子どもがこのようなポイントで交流し、造形活動の中でよさや発見したことを全体に広げ、お互いに認め合い、よりよく表現したいという思いをもつことで、表現することの楽しさを実感できるようにする。

(3) 学びを自らの表現に反映させ 思いを実現させる

子どもはかかわりを通して認め合った自分の表現のよさを生かし、友だちの表し方や作品のよさから新たな課題を見出し、新たな「問い」や「こだわり」をもち自分自身の作品と向き合うことで自己の成長を認識する。そのために、製作の途中で、ワークシートに言葉や図で新たな課題は何かを確認する場を設定する。新たな課題、新たな構想が生まれることでより没頭して作り続けることができる。

また、ふりかえりの方法を工夫して、子どもが自己の成長に気付くことができるようにする。例えば、製作の過程の写真や試作を残しておき、完成後子どもが比較し、ふり返ることで「初めはこうだったが、よりよくするためにこういうふうに作り方をかえたよ。」「自分の思いがうまく表現できた。」ということに気付くことができるようにする。

「切って つないで 大へんしん！」の実践から

(1) 形や色と出会い 試しながらイメージをふくらませる

とても元気で好奇心旺盛な3年生の子どもたちが、体を動かし、楽しんでできる造形遊びの題材を選びたいと考えた。段ボールは身近で、あたたかみがあり、適度な厚さ、扱いやすい重さで加工のしやすい素材である。段ボールを割りピンを使ってつなげるのは、何度もやり直しができ、動かすことができ発想が広がると考えたからである。

はじめに段ボールの構造の話や、強い方向、弱い方向があることなどを知らせ、まずは「切って」そして「つないで」そのあと「大へんしん」の三つの流れでつくることを知らせ、見通しをもたせた。

段ボールの板は子どもにとっての扱いやすさを考えて、一重で5mm厚のものを準備した。作る手順として作るものの設計図をかいてから作っていくのではなく、子どもが段ボールに触れて、段ボールカッターでサクサク、ザクザク自由に切る感覚を楽しみながらイメージをふくらませていくようにした。子どもは切った形を手にして、「何かになりそうだな。」と考え始めている姿が見られた。



資料1 机の間を利用して段ボールカッターで切る

段ボールカッターは低学年でも少し経験しているが、慣れてはいないので、緊張感をもって取り組めた。段ボールカッターはいろいろな種類のものがあるが、持ち手がまっすぐのもので、両刃、先端が尖り気味になっていて、穴をあけ形をくり抜く作業にも向いているものを選んだ。切れ味もよく作業しやすかった。作業は机の上や、机の間を利用するなど、図工室の作業椅子を横に倒して椅子の穴を利用してくり抜くなど必要に応じて選択できるようにした（資料1）。

場の設定として広く図工室を使えるほうがつなげるときによいと考え、初めは机を撤去して椅子のみでやってみた。すると、子どもが足を切りそうになる場面が見られたので、机があるほうが落ち着いて作業できると判断した。つなげるときに広い場所が必要なときは廊下や、ランチルームなど図工室からとび出して活動することにした。

割りピンは、はじめて使うという子どもがほとんどであった。長さは二枚重ねてとめて余裕のある25mmのものを使用した。子どもの段ボールを動かす力で段ボールが破れないよう



資料2 キリで穴をあけ割りピンでつなぐ

補強するために、穴の位置にあらかじめ布ガムテープを貼り、その布ガムテープの上からキリで穴を開けた。段ボールを重ねて、割りピンでつなぐと、留めたところを中心にして動くようになる。発泡スチロール板の上に段ボールをのせて穴がサクッと開く楽しい感覚を味わい、割りピンでつなげたときの動きを楽しみ、動かしながらどんなことができそうかイメージをふくらませていった（資料2）。「割りピンを使うのはむずかしかったけど、おもしろい形になりました。」などのふりかえりがみられた。つなげていく中で、どんどん、長くつなげる子、つなげた形

や、動きから、つくりたい形をひらめき作り始める子の姿がみられた。

子どものふりかえりには、「ザクザク触感がたまらなかったけど、ケガしそうになった。」
「はっこをきるのがむずかしかったけど、うまくできた。」「段ボールを線どおりに切るのは難しかった。」「切るのはかんたんだった。つなげるのは手間がかかった。」「さいしょはてきとうに切っていたけど、あとからおもしろいものができたのでびっくりしました。」「つなぐ所が何回もはずれてたいへんだったけどなおせたのでよかったです。」などの感想が書かれていた。

このように子どもが題材と出合い、段ボールや、キリ、割りピンを触ることで、形や動きから何かを作り出そうとする姿がみられ、意欲の高まりがみられたので、この題材の選択や出合わせ方が有効であったと考える。

(2) かかわりを通して表現の幅を広げる

段ボールを切る、割りピンでつなぐという活動を体験した後で、全体交流でどんなつなぎ方を見つけたのかを紹介しあい、自分の考えを広め、他の人の考えを知ることで自分の気付かなかったアイデアを知ることができるようにした。

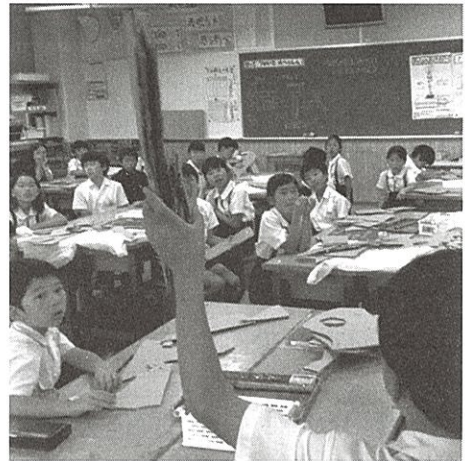
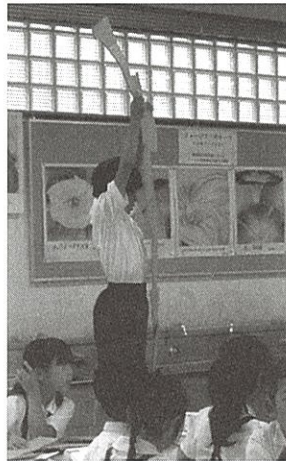
「長くつなげたよ。」という子どもが多かった（資料3左）。他には「折りたためて小さくまとめられるよ。」「大きい真ん中のパーツに小さいものを

つけていったら、人の形みたいになったよ。」などつなげた形に関するものが多かった。25mmの長さの割りピンではあるが三枚重ねられることに気付いた子どももいた（資料3右）。「三枚重ねてみたい。四枚もやってみる。」という子どもがいた。段ボールの重ね方を平面的ではなく、立体的につなげるアイデアを見たときに自分もやってみたいという声が多くあがった。

子どもからはつなぐ形についての意見が多かったので、教師からはつなぐ位置についての作例と、動きのある作例を示して、考えを広げることにした。段ボールの中心にもうひとつ細い段ボールをつなげてまわすと、時計みたい。」という声があがり、3つの切った段ボールを長くつなげてから両端をもって動かすとふしぎな動き方をするので、「やってみたい。」という声があがった。

全体での交流のほかにも、作っている途中で、段ボールを押さえ合い、助け合う場面があり、自然と交流して、「こんなやりかたがあるのか、すごいなあ。」という感想や「どうやったの。」「問い」を投げかける姿が見られた（資料4）。また、どんどん長くつないでいくことで共感し合い、もっと長くしたくなり、友達と一緒につなげ始める子もあらわれた。

複式学級は少人数のため、お互いにかかわる場面が多いのでビンゴ形式のワークシー



資料3 全体での交流でつなぎかたの紹介をする子ども



資料4 つくりながら交流する

ト「ふりかえりビンゴ」を使って交流をすることにした(資料5)。内容は段ボールを切るなど

切って つないで だいへんしん ふりかえりビンゴ

だんボールをわけてつなぐ	きりて穴をあける	子どもたちからアドバイスをもらう
最後の開く時に つめがつかかてはすかしかたで	くるくる回したら すほっとでき ました。	A さんか ら頭のいちをかえたら、と言われた。
子どもたちのお手つだいをする 子どもたちにおてつだいをもらう	だんボールをきる	前よりのしくなるようにくふうする
B さんに お手つだいを してもらいました	思、たよりも かんたかたけど できました。	くひが! 360°うごく ようにしました
うごきをかかえる	子どもたちの作り方のよいところをみつける	大へんしんできた!
くひのうご きを 考えて やりました。	C さんの からくり、おも しろかたです。	ダンボール が、へんなうちう 人になた

など技術的なこと、動きを考えるなど発想構想を促すこと、友達からアドバイスをもらう、お手伝いをする、など友達とかかわらなければできないことを入れた。ビンゴが出来たら、教師がシールを貼ることで意欲付けた。子どもはビンゴの項目を見て、考えながら、造形活動しなければいけないため、必ずかかわるし、前よりも楽しくなる工夫をみつけようとする。資料5では「Aさんから頭の位置をかえたら、と言われた。」と書いてあるように、アドバイスをもらったことや、「わからないことを教えてくれた。」「どんなことをすればよいかいっしょに考えてくれた。」などかかわり合う様子のわかるふりかえりがあった。かかわりをつくりだす

資料5 ふりかえりビンゴ

にはふりかえりビンゴは効果的だった。しかし、子どもによってはビンゴを完成させることを優先させるあまりに、内容をおろそかにする子もいたので、ビンゴの項目をじっくり考えないといけないものにするなど吟味する必要も感じた。

(3) 学びを自らの表現に反映させ、思いを実現させる

3年生では全体での交流の後、ワークシートに友達のつなぎ方で良いと思ったものを書いてから自分の作品を大へんしんさせようと造形活動に戻った(資料6)。個人での活動では、

<p>へんしん ともだちのつなぎかたでいいなあ、やってみたいなあと思ったものは だれの どんな つなぎ方ですか?</p> <table border="1"> <tr> <td>だれの</td> <td>D さん</td> </tr> <tr> <td>つなぎかた 図でかいてもよいです</td> <td></td> </tr> </table> <p>ふりかえり</p> <p>自分が「アッていふハ ヤリかたが「あつたので ためしてみたい です。</p>	だれの	D さん	つなぎかた 図でかいてもよいです		<p>へんしん ともだちのつなぎかたでいいなあ、やってみたいなあと思ったものは だれの どんな つなぎ方ですか?</p> <table border="1"> <tr> <td>だれの</td> <td>E さん</td> </tr> <tr> <td>つなぎかた 図でかいてもよいです</td> <td></td> </tr> </table> <p>ふりかえり</p> <p>ぐるぐるまわ、てい るからどうや、こそれ もわろの!!と思 い ました。</p>	だれの	E さん	つなぎかた 図でかいてもよいです		<p>へんしん ともだちのつなぎかたでいいなあ、やってみたいなあと思ったものは だれの どんな つなぎ方ですか?</p> <table border="1"> <tr> <td>だれの</td> <td>F 君</td> </tr> <tr> <td>つなぎかた 図でかいてもよいです</td> <td></td> </tr> </table> <p>ふりかえり</p> <p>回らせる ようにし た。まねし たいと思、た</p>	だれの	F 君	つなぎかた 図でかいてもよいです	
だれの	D さん													
つなぎかた 図でかいてもよいです														
だれの	E さん													
つなぎかた 図でかいてもよいです														
だれの	F 君													
つなぎかた 図でかいてもよいです														

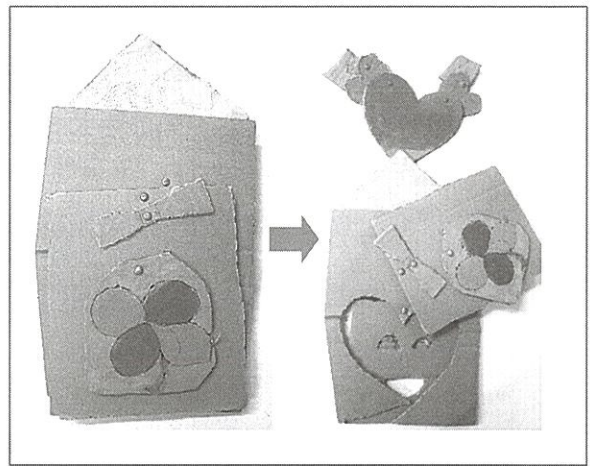
資料6 交流後のふりかえり

つなげることばかりを楽しみ、動くしくみに着目していない子どもが多かったので、友達のつくっていた揺れるしくみの発想を新鮮に感じてまねしたいという意見がたくさん書かれていた。扉を開くように作っているのを見て、「自分も扉を作ってみよう」と具体的に書いている子どもがいた。ワークシートでふり返ることで自分の「こうしていきたい。」という「こ

わり」をもち表現する姿が見られた。

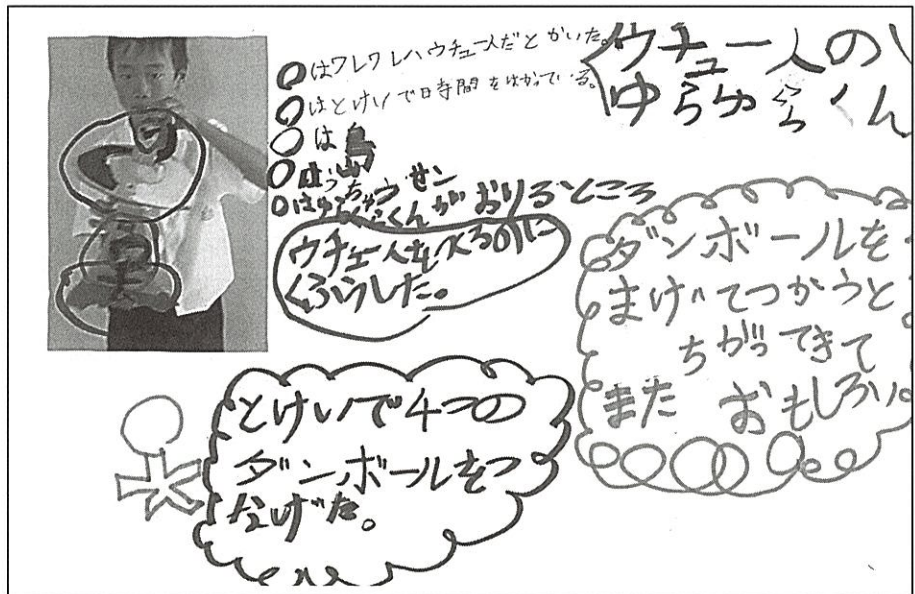
完成後のふりかえりから、動く場所があることで、「動く扉を開けると、初めに〇〇が現れて、次にこんな世界になって、次は…」など作品に物語性が生まれて、「どんどんふやして、楽しい家をつくっていこう。」という「こだわり」をもちながらいろいろ付け足した子どもの達成感のある姿が見られた（資料7）。

複式学級では、完成後、自分の作品の写真を使って作品をポスターにまとめることにした（資料8）。写真で自分の作品を見ることができ、見る人に自分の



資料7 扉から「こだわり」を見つけた作例

思いや「こだわり」を説明しやすいと考えたからである。資料8では「ダンボールをまげてつかうとちがってきてまた、おもしろい」という自分のつくる過程で曲げてみて変化させた「こだわり」を説明している。作品にぴったりのネーミングや写真に丸をつけて横に説明をつけることで自分の思い「こだわり」を伝



資料8 写真を使ったポスターによるふりかえり

えている。1枚の段ボールの板を切る・つなげることを通して作品が出来上がっていく中で、作品に対して楽しい思いがうまれていったのがわかる。

今後に向けて

段ボールを割りピンでとめるという、組みかえのきく材料をつかったの題材にしたので、子どもはそれぞれの思いを実現するために作品を変化させていった。製作する中で形からイメージをふくらませ、試行錯誤できる題材選びが大切であると実感した。

かわりを通して表現の幅を拓けるためには、子どもに身につけさせたい表現を明確にしてそれを引き出せるようなかわり方を考えていかなければいけない。

子どもが学びを自らの表現に反映させ、思いを実現させるためにワークシートや写真などで記録を残しておく、子どもはそのときの思いをよみがえらせることができるので、記録を残す手段を考えたい。

(1) 形や色と出合い、試しながらイメージをふくらませる

『『〇〇してくれる花』～光のさしこむ絵～』の実践から

「〇〇してくれる花」は、透過性の高いプラスチック段ボールに光を通しやすいお花紙を使い、



資料1 比較しながら、形の試作

重ねる枚数や重ね方を考えながら、「やさしくしてくれる・元気にしてくれる・幸せにしてくれる」などの思いに合わせた花のイメージをふくらませながらつくる題材である。

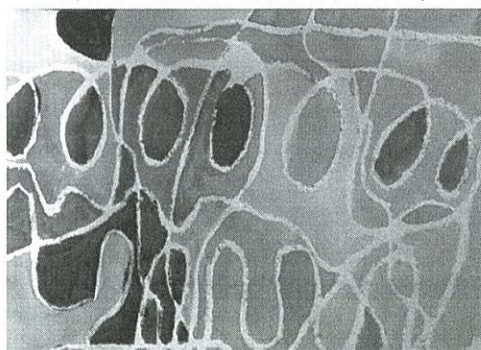
導入では、花を飾った実体験からどんな気持ちになるかを問い、花を飾ることのイメージをふくらませた。子どもからは、「雰囲気よくなる・落ち着く・色や形によって気分が変わる」よさや「いつかは枯れてしまう」儚さが聞かれた。「〇〇してくれる花」では、いつまでも枯れることなく飾ることができ、自分の思いに合わ

せた花をつくることを伝えると、子どもは「自分を明るい気持ちにしてくれる花をつかって、自分の部屋に飾りたい。」「笑顔にしてくれるような花を玄関に飾ると、家族が笑顔になりそうだ。」と意欲的に表現活動を行っていた。

また、32切の画用紙（八つ切の4分の1）を使うことで、短時間で何度もつくり変え、作品が蓄積されていくことで自分の作品を比較しながら試作することができた（資料1）。形の試作には、形に焦点化できるように白のお花紙を使った。このことで、形に注目して、色や実在する花にとらわれることなく、イメージをふくらませることができた。作品の完成までに形→色と段階的に考える時間を設定することで、自分のイメージに合う表現方法を見つけ、表現活動に没頭することができていた。

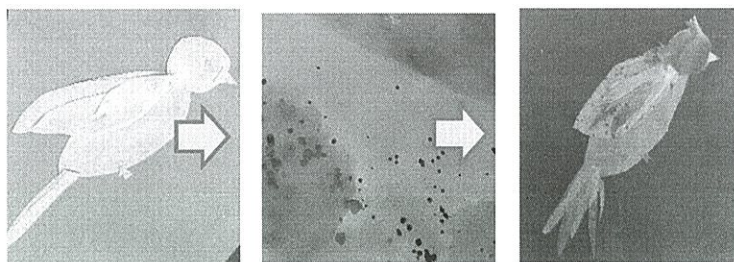
『『色の世界に住む my 色紙の生き物』～絵の具で遊んで～』の実践から

三原色の混色に気付くために、画用紙に白のクレパスで縦の線、横の線を自由に引き、部屋ごとに着色させた（資料2）。形の重なりを知るために、エリック・カールの「はらぺこあおむし」の大型絵本を提示した。この作品は、色とりどりに彩色した薄い紙を切り抜いて貼り合わせたコラージュの技法をもとに作られている。子どもは、試作をくり返すことで、切り方や形の組み合わせに気付くことができた。



資料2 三原色を使い、着色した画用紙

次に、様々な技法（スパッタリング・バチック・スタンプング・ドリッピング・デカルコマニーなど）を使い、厚さの違う紙（画用紙・上質紙・半紙）にmy色紙を製作した。自分のイメージする生き物に合わせて、色や技法、紙を選択し、くり返し試す中で、重ね方、順番などによって見え方が違うことに気づき、生き物のイメージをふくらませられたと考える。



資料3 形の試作→my色紙→完成

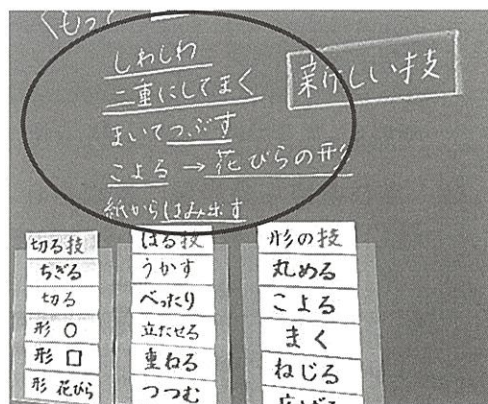
このように、二つの事例から、子どもにとって魅力的な素材や用具

を活用でき、多様な表現が可能である題材を設定することで、「もっと表現したい!」「もっと自分の思いやイメージに近づきたい!」というこだわりをもって意欲的に表現する姿が見られた。こだわりをもつことで、くり返し形や色を試しながら、イメージをふくらませることにつながったと考えられる。

(2) かかわりを通して表現の幅を広げる

『〇〇してくれる花』～光のさしこむ絵～の実践から

形の試作をしている中で、子どもの「もっと自分のイメージに近い作品にしたい。」などの言葉からくもっと〇〇してくれる花らしい形にするには>という課題で形に焦点化した交流を行った。交流のグループは、自分の「〇〇してくれる花」を飾ったときの気持ちで編成した。「いやし」「やさしさ」「笑顔」「幸せ」「楽しさ」で編成し、一人一人違う「〇〇してくれる花」の思いや考えから、新たな表現を知り、かかわりを通して表現の幅を広げることができた。交流の中では、「私はこんなイメージにするために、この技を使いました。」という「こだわり」を伝えたり、「この形にするには、どんな技を使ったの?」「どうやったら、そんな形にできるの?」という「問い」をもち、尋ねたりした。グループでの交流の中で出てきた新しい技を全体での交流で紹介し合った。そこで出た新しい技を取り入れてつくっている子もいた。かかわりを通して共有した技が、表現の幅を広げるものとなった(資料4)。



資料4 全体交流で紹介し合った新しい技

また、色の試作後、形のとくと同様に交流を行った。形に加え色も考えなくてはならなくなったことで、A児は自分のイメージに合った色について迷いが生じた。グループでの交流で、同じグループの友達からアドバイスをもらい、作品に加えたことで、さらに新しい発想がうまれ、表現の幅を広げることにつながった(資料5)。

- A児：私は勇気をもらえる花なので、オレンジを使っています。もっと勇気をもらえる花にしたいと思っていますのですが、何色を使うといいか迷っています。
- B児：「勇気」なので、元気が出る赤色がいいと思います。
- C児：「勇気」は、明るい感じがするので、黄色を使ってもいいと思います。
- D児：Cさんと似ていて、明るい黄色に赤の仲間の色を入れたらいいと思います。「勇気」ってパワーが出る感じがするからです。

資料5 A児の迷いに対するアドバイス

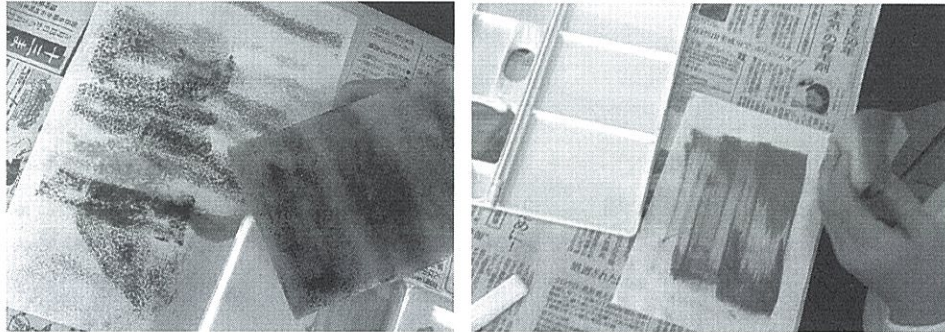
A児のふりかえりには、「私は、勇気をもらえる花の色はどうすればいいかみんなに聞いたら、明るい色を入れるといいよ。と教えてくれました。その後、もう1度作品をつくったら、勇気をもらえる花に近づいて、とてもうれしかったです。」と書かれていた。そのふりかえりから、A児は、自分の思い描くイメージを友達とのかかわりを通して、目に見える作品にできたことに、喜びを感じていたと考える。

『色の世界に住む my色紙の生き物』～絵の具で遊んで～の実践から

三原色を混色する活動の途中に、友達の作品を見合う場をくり返し設定した。絵の具のわずかな加減で色が変わることを視覚的にとらえられるように、相互に作品を見合う場を設定したことで、「この色は、黄色を多めにしたの?」「どうやったら、こんなきれいな色ができるの?」など、「問い」がうまれていた。また、活動中でも、新しい発見があったり、思い通りの表現ができたりすると、「わあ!こんなにきれいな色ができちゃったよ!」「見て!見て!」と声があがった。教師がその場で紹介したり、交流の時間に注目させたりして、子どもの発見

を全体に広めたところ「教えてもらったら、～さんの色と似た色ができたよ。」「その色もきれい。それもやってみよう。」と、新たに表現の幅を拡げるきっかけにつながった。

my色紙をつくるときにも、用具の使い方ひとつで表現の幅が広がる。机間指導をしながら、おもしろい工夫や新しい表現を見つけ、紹介した。例えば、同じスポンジを使っているけど、使う色、水の量やスポンジの使う場所によっても、全く違う表現となることを紹介したところ、スポンジを使って自分の生き物に合った表現を試そうとする子が増えた（資料6）。



資料6 同じ用具（スポンジ）を使った違う表現

このように、形や色などの交流の視点やかかわり合いの形態の工夫で、表現の幅を拡げることができ、表現する楽しさにもつながった。

(3) 学びを自らの表現に反映させ、思いを実現させる

『〇〇してくれる花』～光のさしこむ絵～の实践から

グループ交流後に全体交流をもち、どのような学びがあったかをワークシートに記し、発表する場をもった。E児は、「私は幸せをはこんでくれる花で濃い色を使っていたけど、友達が薄い色を使っているのを見て、幸せははっきりとは見えないけどここにあるよ。という感じがしたので、白を多めに使うことにします。」と話していた。製作した後のE児のふりかえりには、G児の作品から色の組み合わせに気付き、自分のつくりたい花のイメージに近づくと判断し、思いを実現できたことが書かれていた（資料7上）。F児のふりかえりには、そのE児の作品から形の切り方についての気付きが書かれていた（資料7中）。G児のふりかえりには、友達の作品の技や色から気付き、作品に生かしていることが書かれていた。さらに、E児の発言から、クラスの友達にも自分の色の工夫が認められたことの喜びが書かれていた（資料7下）。互いの作品から、新たなヒントを見つけたり、自分の作品が友達の役に立ったと実感できたりしたことで、思いを実現できたことがわかる。

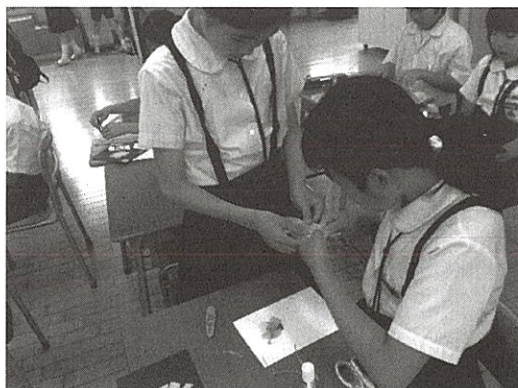
- 交流前は、こい色を使っていたけど、交流でGさんの作品を見て、うすい色を使いました。なぜうすい色かと言うと、「幸せは、見えないけどここにあるんだよ」という感じにしたかったからです。完成作品で使った色は、全色だけど、ふじ・水・緑系の色・白などの色を多めに使いました。落ち着いた感じもするし、うすくなって幸せに近づきました。きれいに、自分の思うように作れて、うれしかったです。（E児）
- 初め、花びらの形ではなくてリボンのような形を重ねていたけど、Eさんの「花びらの形に切る」という技を使いました。その方が自分のイメージしている花に近づくと感じたからです。
色は、青やふじだと落ち着いているようで、「楽しい」には合いませんでした。赤やピンクだともっと「楽しい」「明るい」感じになりました。たくさんの花をはることで、つながりを表して、友達と「楽しく」一つになっているようにしました。（F児）
- 上から白色のお花紙をかぶせるのがいいと思ってくれた人がいたので、うれしかったです。完成する作品がもっといいのに仕上げるために友達の技や色で使えそうなものを試してみました。そして、自分の「〇〇してくれる花」がいいのになりました。（G児）

資料7 交流後のふりかえり

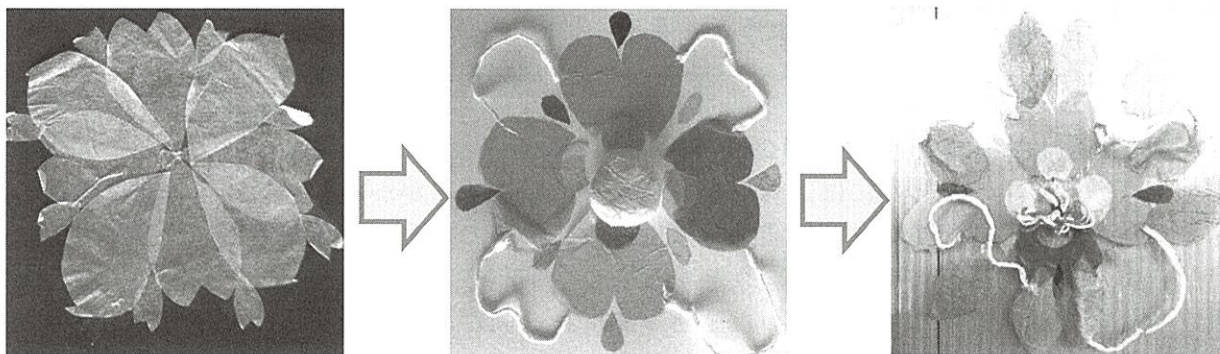
友達とのかかわりを通して学んだ、表現の工夫や作品のよさから新たな「問い」や「こだわり」をもって、自分の作品と向き合う中でつくり変えることができていた。

自分の作品をイメージに近づけていくためには、題材と出合ったときのイメージから、そのイメージを自分で形にしてみる。イメージにより近づけるために、適切な表現がないかを考えて、試す。技能や工夫の不足に気づき、友達作品から試す。など、自分の思い描くイメージを目に見える作品として形にするまでに、つくりながら考え、試しながらつくっていくことが必要である。

E児は、形の試作で「幸せをはこんでくれる花」のイメージからハートの形に切ることを考え、くり返し試した。形の交流で、友達のこよりをつくる技を学び、作品に取り入れた（資料8）。色の試作では、こい色を使っていたが、交流でG児の作品から、うすい色を使うことにした。作品完成後のふりかえりには、「周りの花びらは、ときどきくちゃっとしわをつくってみました。友達がしわを使っていたのがとても印象に残って、きれいでかわいいイメージになりそうと思ったからです。ほかにも、周りにもっとたくさん花びらをはってもいいねというアドバイスをもらって思いつき、ハートの周りにあるしずくの形を、大小の区別をつけてはることにしました。きれいに、自分の思うようにつくれて、うれしかったです。」と書かれていた（資料9）。



資料8 友達から作品に取り入れたい技を学ぶ



資料9 E児の形の試作→色の試作→完成作品

このように、試した作品を自分の学びとして残すことで、製作途中や試してきたこれまで試してきた自分の作品と比較することができ、新しい発見や変容など、学びを自らの表現につなげることができる。

今後に向けて

図画工作科における「考える子」を育成するために、三つの手だてを中心にして、学ぶ楽しさを味わう授業について考えてきた。

成果としては、試作をくり返しながらか、友達とのかかわりを通して、作品に変容が見られた。子どもが互いに共感しながら、自分の作品に変容していく喜びや楽しさを感じることができたといえる。

課題としては、自分の作品への思いや友達の作品から感じたことを自分から話すような手だてが必要であると感じた。作品の変容から、言葉で表現はできていないが、視覚的に作品をとらえて、作品に反映していることがわかった。学びを全体に広めるために、子ども同士で対話が生まれるようにしたり、グループ交流だけではなくペア交流を取り入れたり、交流の場やもち方の手だてが必要であると感じた。また、ふりかえりのもち方についても、限られた時間の中で、ワークシートの内容やペアでの交流など、どのような学びを得ることができたかの一人一人の思いや学びを表出できる場を工夫していきたいと考えている。